

特集 「保健・医療・福祉の連携～ 地域リハビリテーションにおける チームアプローチ」の発刊に際して

高橋 榮明

ここに新潟医療福祉学会誌第3巻第1号（通算3号）を「保健・医療・福祉の連携—地域リハビリテーションにおけるチームアプローチ—」の特集としてお届けする。これは、2002年11月30日に開催された第2回新潟医療福祉学会の発表内容の特集である。

今回の学会において、幸いにも東京大学のリハビリテーション医学分野江藤文夫教授から「保健・医療・福祉とリハビリテーションチーム」との特別講演をしていただき、その抄録を掲載することができた。この講演で地域リハビリテーションという用語中の地域が実際はコミュニティに相当し、共同体という表現が適当ではないか、と話されている。そして、高齢社会における初期の医療活動として、イギリスのマージョリー・ウオーレン医師の活動を紹介されている。その中で寝たきりの患者の治療では、アクティビティが大切であり、チームアプローチが行われる必要があることを強調してあり、現在のチームアプローチの原点ということが、述べられている。特に在宅保健サービスが「包括的保健介護の連続的成分で終末期疾患を含めて障害や病気の作用を最小限に押さえながら、健康の回復あるいは増進、自立レベルを最大化する目的で、個人や家族に、その住んでいる場所で保健サービスを提供するもの」という1988年のハンクウイツの考え方が紹介されている。そのためには、リハビリテーション医療に対して多数の対人サービス専門職によるチームアプローチが必要とし、そして、コアチームとネットワークチームとの考え方が紹介されている。そのように本学の卒業生はチームアプローチでそれぞれ重要な役割を担当することが期待されている。

リハビリテーション専門病院の現況と問題点は、崎村陽子先生が述べ、訪問リハビリテーションについては荻莊則幸先生、県の行政の立場からは鈴木 昭先生、そして本県で先進的な取り組みをしている大和町からは、訪問看護ステーションの現況ということで北村浩美先生、さらに患者、障害者、家族などの立場から日本ALS協会新潟県支部の佐々木憲武さんをご自身のご経験を含めて、この在宅リハビリテーションあるいは在宅療養について、寄稿された。これらは我々が将来、21世紀にあるべき共同体の姿、包括的なリハビリテーションのあり方を考える上において、非常に重要な内容である。

今回は多数の原著論文の寄稿があり、掲載することができた。新潟地域における保健医療福祉分野での共通の発表の場である本誌に、地域の専門職の方々からのさらなる寄稿が待たれる。